

2016年度 プロGRESSコース

未来映画社・プロジェクト報告書

2016年 11月 17日

龍谷大学 3回	青山 里紗子
京都女子大学 3回	木下 実沙都
京都市立芸術大学 2回	佐々木 優
光華女子大学 3回	田中 那苗
京都女子大学 3回	土路生 葵
京都ノートルダム女子大学 3回	中俣 愛美
奈良大学 3回	大和 聖史

1, 未来映画社について

私たちはプロジェクトの目標を立てるにあたって、まずお世話になる未来映画社とはどのような会社なのか、ひいてはそれを取り巻く映画業界の現状はどのようなものなのかについて学んだ。

現在日本では、毎年 500 を超える映画が製作され公開されている¹。自主制作の映画を含めると、その本数はもっと多いただろう。その中で興行的に成功している娯楽映画はほんの数本しかない。しかもその数本も、大手の製作会社が人気のコミックスなどの原作を映画化したものがほとんどである。娯楽映画を作ること成功している小規模製作会社はほぼ存在しないのだ。かつては、映画館ごとに上映する作品の傾向があり、様々な作品が取り上げられていた。しかし、そういった映画館は姿を消し、シネマコンプレックスと呼ばれる複合映画館が台頭してくると、どこも同じような作品ばかり上映するようになった。有名な出演者、有名な原作、それなりに採算が取れそうな作品ばかりが選ばれる。そういった作品は、多くの予算をかけることができる大手の製作会社しか作ることが出来ない。大手ではない製作会社が作った映画は上映の機会を失っていった。

そんな映画業界で、革命を起こそうとしているのが未来映画社である。未来映画社は、平均スタッフ 3 人、予算は数百万円と大手の製作会社と比べればちっぽけな会社である。しかし前作『拳銃と目玉焼』は、娯楽性と完成度において高い評価を受け、全国のシネコンで上映さらには大手レンタル DVD 店で取り扱われるなど、大きな話題を呼んだ²。未来映画社の代表である安田淳一さんが目指すのは、低予算でありながらも高くオリティーで面白い映画を制作し、人を集めるレーベルである。映画は娯楽だ。人を楽しませることが出来れば、その作品を作っているのが大手かどうかは関係ないのだ。

これらの話を聞いたうえで、私たちが考えた目標は、「未来映画社」というブランドを確立することだ。すなわち、「未来映画社」というレーベルは、面白い映画を作るレーベルだと多くの人に認知してもらうということである。「未来映画社」をブランディングするためには、一定のペースで面白い映画を作り続ける必要がある。それには、「映画を製作する→公開する→収入を得る→その収入で次の映画を製作する」という一定のサイクルを確立することが必要不可欠であった。しかし実際には、2013 年に『拳銃と目玉焼』を公開して以降、未来映画社から新作映画は公開されていない。そこで私たちは、次回作である『ごはん』のクランクアップおよび劇場公開、そして次々回作にあたる新作映画のクランクインを具体的な目標として掲げることにした。

これらを達成するために、私たちはまず、現場での作業を主に行う「撮影班」とプロモーション活動を主に行う「広報班」に分かれた。撮影班は、『ごはん』のクランクアップ、および新作映画のクランクインに向けて活動し、広報班は、『ごはん』の興行

¹ 「日本映画産業統計」、一般社団法人日本映画製作者連盟ホームページ。
<http://www.eiren.org/toukei/data.html>, 2016 年 11 月 14 日閲覧。

² Wikipedia, 「拳銃と目玉焼」の項。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%8B%B3%E9%8A%83%E3%81%A8%E7%9B%AE%E7%8E%89%E7%84%BC>, 2016 年 9 月 22 日最終更新, 2016 年 11 月 15 日閲覧。

的成功を目指して活動することになった。

2, 撮影班の活動報告

i, 『ごはん』の追加撮影

『ごはん』は、都会で働く女の子が、父親の死をきっかけに、父親の遺した田んぼを引き継ぐことで疎遠だった父親の想いを知ろうと奮闘するという映画である。この作品は4年前から撮影が続けられており、ほぼ完成の状態にあった。しかし、まだ稲の生育と場面が合っていないなどの理由で、数シーンだけ追加撮影をする必要があった。私たち撮影班は、その追加撮影の現場にアシスタントとして参加した。

映画撮影の機材は、普段の生活では使わないようなものばかりである。実際、触ったことはおろか、見たこともないような機材もあった。そのため、現場に参加する前に、安田さんから機材の講習をして頂いた。講習の内容は、カメラ講習、照明講習、音響講習の3つである。まずカメラ講習では、三脚の扱い方、カメラの設置方法、レンズ交換の仕方を教えて頂いた。カメラ関係の機材はいずれも高価で、少しでも扱い方を間違えると壊れてしまう恐れがあった。三脚を開く順番やコードの処理の仕方など、細やかな注意を受けた。照明講習では、カメラ講習と同じように照明機材の扱い方を教わり、その後照明の基礎である三点照明のやり方、レフ板を使って役者の顔に光を当てる方法を教わった。私たち素人が動画を撮るとき、辛うじてカメラワークや声が録れているかどうかには注意するかもしれないが、光の当たり具合にまで気をつける人は少ない。しかし実際は、照明が担う役割は非常に重要である。照明が一つ変わるだけで、そのシーンの雰囲気だけでなく天気や季節まで変わってしまうのだ。レフ板も、一見すると銀紙を貼ったただの発泡スチロールの板に思えたが、これも映像にすばらしい効果をもたらすということを学んだ。私たちは照明講習の時に、コーディネーターである渡邊先生をモデルにレフ板の実験をした。光が当たっていないと画面の中の先生は普段と変わりなかったが、うまく光を当てると画面の中の先生はより生き生きとして見えた。さらに、安田さんが陰影を強調するようにレフ板で光の当て方を変えると、まるでノーベル賞学者かのような偉大な人に見えたのだ。私たちは、照明の力の凄さを身をもって実感した。音響講習は、他の二つと違って音響の担当者だけが受けた。マイクと中継器であるミキサーの接続方法やピンマイクのセッティング方法を教わった。

これらの講習を受けた後、私たちは実際に現場に参加した。現場には主に2~3人で参加し、カメラアシスタント、全体のアシスタント、音響に分かれた。カメラアシスタントの主な仕事は、カメラのセッティング、レンズ交換、撮影補助の3つだった。カメラのセッティングは、事前に指導があったものの自分たちで取り組むとなると難しい点も多く、接続に戸惑ってしまった。その為、必要以上にカメラのセッティングに時間がかかってしまい迷惑をかけた。始めは、なんとか協力し合いながらカメラ設置を完成させるので精いっぱいだった。レンズ交換も、監督に指示されたレンズを素早く渡しレンズを取り替えるという仕事なのだが、似たような見た目のレンズをなかなか覚えられず、遅いと怒られることもしばしばだった。しかしどちらの仕事も、何

度も現場に行くうちに要領を得ることが出来るようになった。全体のアシスタントは、現場の流れを常に把握し、臨機応変に動くことが必要な仕事だった。馴れない現場で次に起こることを予想して動くのは難しく、苦労した。音響の仕事では、ブームと呼ばれる長い棒のマイクを持ち、俳優の台詞だけでなく周囲の環境音も録音した。暑い夏の外での撮影であっても、重いマイクを持ったまま、撮影中は雑音が入らないようにじっとしていなければならない。音響の仕事は想像以上に、肉体的にも精神的にも大変な仕事だと知った。しかし、映画には欠かせない音を録音するという重要な仕事を経験させて頂くことで、映画作りに携わっていると強く感じた瞬間でもあった。また、現場での録音作業以外に、音響には効果音の作成という仕事があった。私たちが担当したのは、コンバインが故障するときの音である。効果音を作成する理由は、映像にリアリティを持たせるためと、重要なシーンであったため既存の効果音の転用するわけにはいかなかったからである。その方法は、私たちの想像とは違い、音作成に使えるような道具を選び、様々な鳴らし方を組み合わせるといって非常にアナログなものだった。しかし、意外にそれが難しかった。単調にならないとよように気を付けながら、物語を作るようにインパクトを与えるところと穏やかな部分を組み合わせで作った。納得できるものはなかなかできず、何度も相談しながら試行錯誤を繰り返した。完成した音そのまま使われることはなかったが、安田さんの修正を受け、『ごはん』の中で使用して頂くことが出来た。

ii, 神戸の撮影への参加

『ごはん』の撮影以外に、安田さんがカメラマンをされている神戸の撮影現場に参加させて頂くことが出来た。インターンの学生として参加していた今までの現場とは違い、安田さんのスタッフとして参加したため、普段よりも責任感と緊張感を持って仕事に取り組むことが出来た。しかしその一方で、何をしたいのか戸惑っている間に、本当は私たちがやらなくてはいけない仕事を他のスタッフの方にさせてしまったり、邪魔になるからと現場から出されたりしてしまったり。やることがわからなければ自分から聞いたり、やっていいのかを迷うのではなくもっと率先して自ら動くべきだったと反省している。しかし、未来映画社の現場とは違い、多くのプロのスタッフに囲まれて仕事するという経験はとても新鮮で、すべてが目新しく感じた。休憩時間には、普段は話す機会もないスタッフの方々と交流することが出来、とても良い経験になった。

iii, 新作準備

『ごはん』の完成にめどが立ってきたため、次回作の製作にとりかかることになった。私たちはその企画段階から携わることが出来た。

新作映画を製作するにあたり、私たちは企画をさせて頂くことになった。企画はコンペ形式だったが、企画が通れば自分の構想が映画になるということで私たちは色めきだった。それぞれ考え、意見を出し合い、同じテーマで企画を考えながらそれぞれが特徴あるものを考え出した。もちろんすべてが採用されたわけではないが、想像を形にしていく過程はとても楽しかった。

そして私たちの企画の中から選ばれた一つを基に、短編映画を作ることになった。撮影準備として、私たちはロケハンをさせて頂くことになった。ロケハンとはロケーションハンティングの略で、監督のイメージに合った物語の舞台を探す仕事である。今回探したのは、「寅さんに出てきそうな食堂かお好み焼き屋」である。大学の近所や知り合いの店など何件か目星をつけていた私たちは、すぐに終わらせることが出来るだろうと甘く考えていた。しかし実際には、営業の邪魔になるからとなかなか撮影許可が下りなかったり、許可を貰っても監督のイメージに合わなかったり、周囲の音がうるさく撮影には使えなかったりとなかなか良い店が見つからなかった。何十件も交渉したが、たったの数件しか候補地は見つからず、とても大変だった。そして何よりも大変だったのは、本番で使う店が決定した後、候補にしていた店に断りの電話をすることである。何件も断られ、へこんでいた私たちに優しく丁寧に対応してくれたお店の方々に、断りの電話をかけるのは心苦しかった。

iiii, 撮影班のまとめ

今回、映画撮影に関わる様々仕事をさせて頂いた。スクリーンで見る5分が、真夏の暑い最中丸一日かけて撮られた汗の結晶であると知った。普段の生活では触れるこのなかったであろう機材について勉強し、出会うことのなかったであろう人々から様々な話を聞くことが出来た。私たちはとても貴重な経験をする事が出来たと感じている。

良いことばかりではなかった。映画製作という仕事の特性上、予定していたスケジュールが急に変更になることも日常茶飯事だった。ロケ場所や出演者の予定、天候など様々な要素で、撮影自体ができなくなってしまう。そのため、私たちのインターンシップの予定も大幅に変更になってしまった。それでも、それらをうまく調整するマネジメント能力や急なハプニングに対する対応力が必要なのだと学ぶことができた。

もちろん反省すべき点も多くある。馴れない作業に戸惑い同じ失敗を繰り返してしまったこと、気が付かなければならないことに対して気が付けなかったことや積極的に行動することが出来なかったことなどが挙げられる。これらの点は、映画業界だけのことではなく、どんな業界においても同じことが言えると思う。私たちは今後どのような業種に就職することになるかは分からないが、これらの反省点は活かしていかなければならない。

現場で出会った人々の仕事に対する情熱に触れ、映画作りの大変さを肌で感じ、映画が出来上がる瞬間を目の当たりにしたことで、私たちは今までとは違う視点で映画を観ることが出来るようになった。今回のインターンシップは、私たちにとって忘れられない経験となっただろう。

映画製作という仕事はその特性上、予定していたスケジュールが急に変更になることも日常茶飯事である。撮影に関してもロケ場所・俳優さんやスタッフさん・天候など様々な要素があるが、そのうち1つでも不具合があると撮影自体ができなくなってしまうので、それらをうまく調整するマネジメント能力や急なハプニングに対する対応力が必要なのだと認識した。

3, 広報班の活動報告

i, プレスリリースの作成

プロジェクト開始直後に、安田さんより直接プレスリリースの説明を受けた。同時に、その場で安田さんへのインタビューの機会を頂いた。しかしながら、私たち自身が教えて頂いた内容を、上手く消化しきれないままに進めてしまった。そのため、参考になる情報を集めることに失敗してしまった。その後、一度目のプレスリリースの提出を行ったが、プレスリリースと呼べるような文章を作ることができなかった。できる限り主観性を排除し、新規性や社会性、客観性を持たせなければいけないと注意を受けた。

プレスリリースは感情に訴えかけるのではなく、事実を記さなければならない。具体的な数字を用いたり、今ある言葉を組み合わせる新しい言葉を作り出すなど、教えて頂いたプレスリリースのルールの中で作成を行った。何度も改善を行い、提出を繰り返したが、私たちと安田さん双方共に納得する内容のプレスリリースを作り上げることはできなかった。最終的には、私たちが作成したものを基に安田さんが完成版を作ってくださった。

ii, インタビュー・SNS を利用して宣伝

『ごはん』の追加撮影が行われていたため、見学をさせて頂いた。そこで出演者の方々へのインタビューの機会を頂いた。実際にインタビューを行ったのは主演の沙倉ゆうのさん、俳優の井上肇さん、同じく俳優の福本清三さんである。突然のことであったため、事前に調査をすることができなかった。過去に出演されていた作品などを把握し、拝見できれば良かったのだが、そうした準備もできなかったことが悔やまれる。インタビュー内容は『ごはん』の内容について、安田さんについて、そして私たちが個人的に興味を持ったことの3点である。この時点ではまだ本編を拝見していなかったため、踏み込んだ質問などはできなかった。また、ちゃんとしたインタビューの経験など無く、緊張していた。しかし出演者の方々には優しく、拙い私たちの質問にもとても丁寧に答えてくださった。

SNS を利用しての宣伝では未来映画社の Facebook に、見学させて頂いた追加撮影の様子、そしてインタビューの様子を掲載した。記事作成の際に、安田さんから「女子大生らしい文章」を求められた。しかし「女子大生らしい文章」とは何か分からず苦戦した。また、記事の中の文章だけでなく写真も、閲覧者に対し「何を伝えたいのか」を考え撮影することが重要だと学んだ。

iii, メディアへの持ち込み

10月から、作成したプレスリリースを基に、公開撮影と試写会に関する広報活動を開始した。この活動の目的は公開撮影と試写会の様子取材し、『ごはん』を宣伝して頂くことである。本来プレスリリースはファックスで送るものだが、学生という利点を活かすために、できる限り自分たちで持っていこうと決めた。直接資料を持ち込む

ことで、プレスリリースの文字だけでなく口頭で映画を宣伝することもでき、よかったと思う。

資料を持ち込む前には、アポイントメントを取る必要がある。この際に最も重要なことは、電話を受け取る相手の方は貴重な時間を割いて下さっているということである。電話をかける際には、そのことを念頭に置いて話をした。また電話では声しか伝わらないため、端的に分かりやすく伝えなくてはならず、苦労した。

直接資料を持ち込むことができたのは、NHK 京都放送局、株式会社京都放送、株式会社毎日新聞社京都支局、株式会社京都リビング新聞社の4社である。株式会社京都リビング新聞社は公開撮影を取材しに来て下さり、公開直前に記事として掲載して頂けることになった。また、株式会社毎日新聞社京都支局は別日に安田さんへの取材をして下さり、記事として掲載して下さることになった。しかし、株式会社リーフ・パブリケーションズ、株式会社精好、株式会社京都新聞社、の3社は時間の都合により、ファックスで送信するだけになり、検討して頂いているところである。

iiii, 広報活動のまとめ

一番苦労したのがプレスリリースの作成である。当初の予定から大幅に延び、作成に約2カ月もかかってしまった。その一番の原因は、受け入れ先の方とインターンシップ生との間に大きな溝があったことである。受け入れ先の方の「簡単」が、素人である私たちインターン生と同じであると考えたのが間違いであった。また、「受け入れて頂いている」と考えすぎ、遠慮して意見を言えなかったことも原因の一つである。相手に敬意を払う必要はあるが、意見を言わないのでは物事は進まないということを学んだ。これらの二点の問題には、コミュニケーション不足ということが共通している。LINE というツールを利用して連絡を取っていたが、やはり文字だけでタイムラグという問題があり、それだけでは不十分であった。直接話し合う機会を早い段階で作るべきだったと思う。

SNS での情報発信は案だけは多く出ていたが、ほとんど行動に移すことができなかった。各自が役者の方々にインタビューをさせて頂いたことを基に、フェイスブックに一度ずつ記事として投稿するだけに留まった。その理由は、プレスリリースの作成に追われ、手が回らなかったからである。案を出すだけでなく、行動に移さなければ意味がない。案を出した時点で、いつから始めるのか、どのような内容にするのか、誰が行うのかという具体的なことを計画しておくべきだっただろう。そうすれば、たとえ計画通り進まなかったとしても、実行することは可能だっただろうと考える。計画の重要さを身に染みて感じた。また、責任の所在を明確にするため、役割分担も細かく行うべきであった。

役者の方々へのインタビューは突然頂いた機会であったため、事前に準備することが出来ず、大変失礼なことをしてしまったと感じている。それと同時に、機会は突然やってくるものなのだと痛感した。このような機会を上手くいかせるようになりたいと思った。また、インタビューの難しさも実感した。ただ質問するだけではインタビューにはならない。「何のためにインタビューをするのか」によって、質問の内容を変えていかなければならない。相手のことをよく調べ、自分が聞き出したい答えにうま

く誘導するのだ。そのためには、インタビューする側が話し方、聴き方、表情などを上手く使い分け、より話しやすい雰囲気を持っていかなければならない。それが一番難しいなと感じた。

メディアへの持ち込みは、最も達成感を感じることができた仕事であった。それと同時に、未来映画社の代表として扱われているため、より責任感を感じることもあった。これはプレッシャーではあったが、その分成功したときの喜びも大きかった。反省点は、大きな媒体ばかりを対象にしたことである。フリーペーパーなどの小さな媒体も調べ、アポイントメントを取るべきであった。そうすれば、より多くの媒体に『ごはん』を取り上げてもらえた可能性がある。また、公開撮影と試写会の予定日の二週間前からアポイントメントを取り始めたため、時間的余裕を持つことができなかった。さらに、基本的な社会人としてのマナーも知らずに始めたため、電話をかける際に要領を得ない説明になってしまった。

今回、広報活動を通して、成功も失敗もどちらも体験することができた。成功は自信に繋がり、失敗からは多くのことを学ぶことができた。また、社会人の方々と関わることで「働く」ということを肌で感じることもできた。インターンシップで得た経験は今後の就職活動はもちろん、普段の生活でも役立てることができるだろう。

4. 未来映画社でのインターンシップについて

撮影班、広報班共通して言えるのは、普段何気なく見ている映画の裏側を知ることが出来たということである。映画を作る大変さも、それを世に出す苦勞も、肌で感じる事が出来た。映画製作には多くの人に関わり、こんなにも長い時間をかけて作られているのだということを知ることが出来た。また、効果音作りや出演者へのインタビュー、メディアと直接お話するなど、重要な仕事を任せて頂いたことで、責任を持って仕事をする事の大切さも学んだ。その上で2件の新聞社を取材に誘致するという成果(画像1)を残せたことや、自分達が役割を持って撮影された映像を見たときの感動によって、達成感と自信を得ることができた。さらに、様々な人と会うことも出来た。撮影現場でいろいろな話を聞かせてくれたスタッフや役者の方々、困っていた時に助けてくれたコンソーシアムの方やアドバイザーの先生方、そして同じインターンシップ生の皆、決して自分一人ではこのインターンシップを無事に終わらせることは出来なかつただろう。人との出会いほど価値のあるものはないと感じた。

そして同時に、コミュニケーションの難しさも感じた。特に撮影班は、実習では個人での活動が多く、未来映画社全体での活動となった時にうまく情報を伝達することが出来なかつた。私たちは、受け入れ先との連絡、インターンシップ生同士の連絡にLINEを用いていた。しかし、LINEでは認識の相違や、言いたいことがうまく伝わらないことが何度もあった。うまく伝わったつもりでいても、実際に会ってみると全く違う風に伝わっていたということもあった。けれど、7人全員が違う大学という状況の中で、頻繁に会うこともできず、やはりLINEなどのツールに頼らざるを得ない部分も多かつた。そこで、もっと積極的に確認するようにしていれば、円滑に仕事を進めることが出来たのではないだろうかと考える。社会に出ても、コミュニケーショ

ンの課題は常に付きまとう。今回のように、仕事で LINE などのツールを使う場面も出てくるだろう。その時には、今回の苦い経験を生かしていきたい。

映画製作、広報に携わるという他にはない貴重な機会を通して、仕事をする上で楽しいことだけでなく大変なことの両方を体験することができた。そして、多くの人と出会い、様々な考えに触れたことで、大きな刺激を受けた。また、実習中に各自が体験した「うまくいったこと」や「失敗したこと」から、自分の得手不得手を改めて知ることができた。さらには、未来映画社そして安田さんの掲げる「小規模でもクオリティーの高いものづくり」の肝を体感し、「妥協をせずに丁寧に仕事に向き合うこと」を学んだ。このことはどの分野においても共通する、大切な事である。私たちが当初掲げた、「未来映画社」のブランドを確立するという大きな目標は、残念ながら達成することはできなかった。けれど私たちは、今回のインターンシップで多くのものを得ることが出来た。私たちの今回の活動が、未来映画社がこれから映画を作り続けていくうえで一助となっていれば幸いだ。

画像 1 : 2017 年 1 月公開予定の『ごはん』ポスター（左）と
2016 年 11 月 16 日付毎日新聞地方版に掲載された安田さんのインタビュー記事³(右)



(本文=約 9500 文字)

³ 関連 URL, <http://mainichi.jp/articles/20161116/ddl/k26/070/405000c>.